



## 【士師記：神様を正しく知る事が祝福です。】

聖書本文:士師記2章6-10節/ 暗唱聖句:申命記6:5-7

説教: 牧師 鄭南哲

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!本格的な真夏日が続いていますが、一週間も主にあつて守られましたか?先週申し上げたように、ヨシュア記はイスラエルの民がヨシュアの指導のもと、約束の地に入ってその地を征服し、その地を部族ごとに分ける過程が記録された聖書です。ですから、ヨシュア記はイスラエルの先祖たちにカナンの地を与えると約束された、その約束を守っていかれる神様の真実さをよく表して下さいます。(ヨシュア1:11)。

## 〈1. 士師記はどんな聖書ですか?〉

ヨシュア記に続いて旧約聖書の7番目の士師記はどんな聖書でしょうか?士師記は神様の指導者ヨシュアの死から神様の預言者サムエルの登場までのイスラエルの歴史が記録された聖書です。つまり、イスラエルの民がカナンに定着して、ヨシュアが召された後からサウルが登場し王になる間の約350年(1388-1052年BC)の歴史が記録された聖書です。

士師記では13名の士師らが出ています。士師というのは‘民の訴訟(そしろう)を裁判する者’という意味として‘裁きつかさ’,もしくは‘治める人’と言う意味があります。そして‘救う者(deliverer, savior, 士師記3:9)’という意味もあります。イスラエルの民が罪を犯し、墮落して周囲の国々に圧制(あっせい)されると、イスラエル民は神様に助けを求め、神様は士師を立てて彼らを救って下さいました。しかし、神様が救って下さってから時間が経てば、またイスラエルの民は罪を犯し、また神様に背をむけることを繰り返すのです。そういうわけで、士師記では‘犯罪-圧制(苦難)-懇願-救い’のサイクルが七回も繰り返されています。

さきほど、申し上げたように旧約の士師の時代とはイスラエルの民がヨシュアの指導のもとでカナンに着いて土地を配分され住み始めからの約350年間の時期になりますが、ところが、イスラエル民は偶像崇拜と、背教、道徳的墮落が極めて深刻な時期でした。ですから、士師記の時代は一言で言うと旧約の靈的暗黒期(あんこくき)でした。士師記はこの時代の特徴を、“そのころイスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見える事を行っていた。”と記録していますが、二回も同じく表現されています。(士師記17:6,21:25)

“めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた”ということはこの時代に規律や規範などがない無法(むほう)の時代だったという意味です。自分たちの考えだけが正しくて法みたいに、規律のようだったため不義と墮落と不正と腐敗だらけでした。これがまさに暗黒時代になった士師時代の特徴です。まるで、教会歴史の中でも中世時代が靈的暗黒の時代だったように、旧約の時代、士師の時代というのはイスラエルにおいて靈的に乱れる時期であったということです。靈的墮落、靈的退歩(たいほ)、もしくは靈的愚鈍(ぐどん)、これらすべてが暗黒の原因でした。なぜ、約束されたカナンの地に入って、ついにカナンで自分たちの土地を手に入れたのにもかかわらず、祝福の時にならなかったのでしょうか?

なぜ神様が士師たちを立てなければならぬほど靈的暗黒期になったのでしょうか?

士師記を通して神様はまた我々に何を示し、教えてくださるのでしょうか?

## 〈2. 靈的暗黒期の原因〉

## 一つ目、神様に対する無知

事実、これが士師時代の根本的問題でした。神様に対する無知がすべての問題の始まりでした(士師記2:10)。

それかわり、イスラエルの民たちは神様ではないほかの神々を拝むことでした。創造主である神様に仕えるべき人間が、神様を知らない、ほかの神々に仕えるようになります。神様への無知は靈的な暗黒を招いてしまいます。神様なしの生き方!これは個人だけではなく国や社会を共同体全体を暗黒の時期に陥(おとし)れてしまったのです。

愛する信仰の家族のみなさん!BC9、10世紀の中世時代がそうではありませんか? 教会がますます聖書の教えから離れ、神様への知識がなくなり、キリスト教が神ではないものを拝む宗教に変質し、ついて靈的、道徳的、社会的墮落した暗黒の時代を招いてしまいました。今もみなさん、ヨーロッパのローマカトリック教会を訪問してみれば、純粋なキリスト教ではなく、西洋的仏教のような感じがします。神様への正しい信仰と御言葉から離れると、結局目に見える祝福、目に見えるものを立たせ拝んだり、本来の信仰から離れ、道徳的、倫理的脱線(だつせん)を伴ってしまうのです。これがまさに人類の歴史からの教訓ではないでしょうか?我々も同じく神様のない生き方、神様の御言葉から離れた生き方をする時、その結果は靈的な墮落を招いてしまい、健全な生活、神に喜ばれる生き方が揺らいでしまうという事を心に刻んでおきたいと思えます。

## 二つ目、偶像崇拜と背教

神様に対する無知は必然(ひつぜん)的に偶像崇拜につながってしまいます(士師記18:14-20)。イスラエルの民がいったいなぜ?と思われるかも知れませんが、神様を知らない時、人間はジョン・ホワイト(John White)さんが適切に指摘したように、人間は真の神を信じなければ、神ではないものを神のように拝もうとする存在です。士師時代のイスラエルの人々は彼らを救いに導いて下さった神様を忘れ、その地、つまりカナンの偶像に拝み始めました。ですから、イスラエル民は全民族的偶像崇拜が行われました。当時、カナンの神と言うのはバアル、アシュタロテ、アラムの神々、シドンの神々、モアブの神々、アモン人の神々、ペリシテ人の神々などに全部仕えたのです(士師記10:6)。

士師記10章6節を見て見てください。”またイスラエル人は、主の目の前に重ねて悪を行い、バアルや、アシュタロテ、アラムの神々、シドンの神々、モアブの神々、アモン人の神々、ペリシテ人の神々に仕えた。こうして彼らは主を捨て、主に仕えなかった。”と書かれています。

当時カナンカナンの宗教は多神教たしんきょう（たしんきょう）であって、その宗教は二つの特徴を持っていました。

一つ目は残酷性です。カナンカナンの宗教は農耕のうこう（のうこう）の神として極めて残忍でした。時には自分の子供さえもいけにえとして焼いて殺しました（申命記12:31）。豊かさや風雨ふうう（ふうう）のため神々を喜ばせると言う理由で生きている人さえもいけにえとしてささげたりしてました。申命記12章31節によると、“彼らは、主が憎（にく）むあらゆる忌み嫌うべきことを、その神々に行い、自分たちの息子、娘を自分たちの神々のために、火で焼くことさえしたのである。”と言いながら神様は決してカナンの人々と付き合わないようにと命じられました（申命記18:10）。

カナンカナンの神々の中、特にモレク（Molech）はアモンの神（列王記第一11:5,33）ですが、一番残酷でした。彼らは子供たちを生きたまま焼いてモレク（Molech）にいけにえとしてささげました。後に起こった信じられないことですが、神様の人だったソロモン王でさえ靈的に乱れた時、ヒンノムの谷にモレク（Molech）のための祭壇を築いたことがあります（第一列王記11:7）。後にイスラエルのアハズ王（第二列王記16:3）や、ホセア王（第二列王記17:17）、マナセ王（第二列王記21:6）もモレク（Molech）の神殿に自分たちの子供をいけにえでささげる最悪の罪を犯してしまいました。このようにカナンカナンの宗教は宗教という名前で命の大切さや家族の絆さえも破ってしまうほど残酷でした。間違った宗教というのがどれだけ反道徳的、反社会的なのかをよく表してくれます。そういうわけで、神様は彼らに影響されず、ご自分の民イスラエルが聖く守られるために、カナンカナンの征服の戦いの時、彼らと妥協せずに絶滅（ぜつめつ）（ぜつめつ）するようにと厳しく命じられましたが、そのように従わず、残酷な罪を犯してしまいました。

### カナンカナンの宗教の二つ目の特徴は淫乱性です。

カナンカナンの地の神々は豊作（ほうさく）（ほうさく）の神として、人や動物のように性的関係を通して豊かな産物をいただくと思われて神々の前で淫乱な行為を行ったのです。そういうわけでカナンカナンでは男性の神と女性の神を作ったわけですが、バアルは男性の神であり、アシュタロテは女神でした。カナンカナンの宗教は自然の生産力（fertility）（fertility）は男性の神と女神との関係を結ぶ事によって与えられると思われていたので宗教という名目で公式に、そして公開的に淫乱を行い、神を喜ばせると言う名目で男性の祭司と女性の祭司たちが性的儀式を行いました。本当に間違った宗教がもたらす弊害（へいがい）（へいがい）がどれだけ深刻だったのか想像することができます。出エジプト34章15節には、“あなたはその地の住民と契約を結んではならない。彼らは神々を慕って、みだらなことをし、自分たちの神々にいけにえをささげ、…”と書かれています。そういうわけで、神様は彼らを絶滅（ぜつめつ）（ぜつめつ）するのみならず、彼らとは一切関わらないようにと命じられたのです。聖い信仰と生活を守りながら、カナンカナンの偶像崇拝者たちの淫乱な生活がイスラエルの民に浸み込まないためでしたが、結局従わなかったためイスラエルの神の民たちも淫乱な行為を行ってしまいました。

### 三つ目、不法と不道徳

神様に対する無知と偶像崇拝と一緒にこの時代の三つ目の問題は不法と不道徳（ふぼうとふだうとく）（ふぼうとふだうとく）でした。異教の崇拝はその時代の個人と社会に不法と不義、そして道徳墮落をもたらしました（士師記18:11-13）。道徳的、倫理的規範（きはん）（きはん）がありませんでした。これについて士師記はこう表しています。“そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた。（士師記17:6,21:25）”士師記17章以下の本文はその時代がどれだけ墮落したのかをよく表しています。絶対的基準も、道徳的ルールもなく人々は自分勝手に生きました。その結果淫乱、殺人、性的墮落は想像を絶（ぜつ）（ぜつ）するほどでした。今日の時代だけではなく、すでに当時同性愛と同性の淫乱な行為が蔓延（まんえん）（まんえん）に行われ、一人の女を集团的に強姦（ごうかん）（ごうかん）して殺したり、ある地域の約4万人を大量虐殺するなど極めて恐ろしいほどでした。

士師時代を見ると、神様がイスラエルの民に何度も強調された御言葉が“わたしはあなたがたをエジプトの地から連れ出したあなたがたの神である。わたしのほか神々に仕えてはいけません。”がよく理解されると思います。神様は何度も何度も救ってくださり、今まで彼らを導いて下さった神を忘れないように教えて下さいましたが、士師時代の人々は神様を忘れ、知らず、神様の行われたことさえも分かりませんでした。士師時代の根本的な問題は神様に対する無知から始まったわけですが、神を知らず、神から離れ、信仰から離れてしまった人やその人生がどうなるかよく士師記では生々しく教えて下さっています。

### <3. いったいなぜ神を信じていたイスラエルの民は神様を知らなくなってしまったのでしょうか？>

その原因はどこにあったのでしょうか？今日の本文にその原因が表されています。7節と10節をみてください。7節を見ると、ヨシュアと神様の救いの御わざを見て、知っている人たちが生きている間はちゃんと神様を信じ、神に仕えていました。つまり、ヨシュアの時代はみんなが神様を知り、神様に礼拝を捧げていました。

ところが10節をご覧ください。ヨシュアとその時代の人々が死んだ後、次に起きた世代は神を知らず、そして、神様の行った御わざも知らない記録されています。この意味は信じられませんが、ヨシュアとその時代の人々が働きが忙しかったのか、自然に信仰が継承されると油断してしまっただけなのか、神様に対する信仰と御言葉、神様からの愛の戒めを自分たちの子供たちや子孫にちゃんと伝え教えなかった事を意味します。

出エジプトの旅の間、数多くの奇跡と御業をとおして表された神様の救いと愛を次の世代に教え、伝えるようにと絶えず、神様は強調されたのにもかかわらず、イスラエルの民は一番大切な事を後回しにし、真剣に従いませんでした。申命記6章4-9節をご一緒に読んでみましょう。

覚えなさい！という神様の救いと導きをないがしろにしてみました。イスラエルの民がモアブの草原に集まった時、神様はモーセをとおしてカナンの地に入ったら“あなたも、そしてあなたの子も、孫も、あなたの神、主を恐れ(申命記6:2)”神様のおきてと命令を守り、自分や、自分の子孫たちに教えるように命じられたのに結局、カナンに入ってからそうしなかったわけです。

その結果、ヨシュアとその時代の人々が死んだ後、次の世代の子孫たちは神様を知らなかったのです。子供たちに神様の御言葉を通して神様はどんな方であるのか、神様の愛のおきてなどを教えなかった結果、神様に対する無知は個人だけではなくイスラエル民族全体の行き先に決定的影響をもたらせてしまいます。11節をみてください。

“それで、イスラエル人は主の目の前に悪を行い、バアルに仕えた”約束の地に入って約束の地をいただいて安定した生活はできたものの、たった一世代も過ぎず、霊的暗黒の時代を招いてしまったのです。

士師記の今日の本文は改めて、**信仰教育**がどれだけ大切であるのか教えて下さいます。我々がこの世を去った後、我々の子供たちが、もしくは我々の子孫が神様を知らない、まったく関係ない人生となって生きる事を想像して見て下さい。我々の子供たちが神様は誰だろう、イエス・キリストが誰であるか知らないままこの世の流れに沿って生きると考えて想像して見て下さい。父や母は教会に熱心な方、教会の執事、役員、働き人だったのに、その子供は神様のない生き方をするなら、御国に行ってもどんなに悲しくなりそうですか？今日、我々クリスチャンたちに与えられている大切な使命があれば、もちろん信じていない方々に福音を伝えることも大切ですが、同時に我々の子供たちに、家族に神を知る事ができるように御言葉を伝え、信仰によって育ち、神様を信じる信仰によって生きると、神様の御言葉から離れないように教え、見本になることでしょう。

#### <4. すべては不従順の結果>

実際、ヨシュアの時代、カナンの地を攻め取る時、神様の命令に徹底的に従ったなら、イスラエルの子孫たちの行き方は変わらなかったかも知れません。しかし、**当時イスラエルの民は最初から神様に従いませんでした。**

士師記1章によると、イスラエルの民の不完全な征服について記録されています。つまり、イスラエル民はわずかなことだったと思ったかも知れませんが、不従順の痕跡(こんせき)を残してしまっただけです。“**追い払わなかった**”と言う表現が何度も繰り返されています(1:19,21,27,28,29,30,31,33,34節)。

実際にイスラエルの民はカナン人たちを全員追い払うことが十分できました(申命記20:1)。神様は彼らにカナン人たちと戦って勝てる、そして、彼らを追い払う力をも与えて下さいました。しかし、イスラエルの民は追い払えなかったのではなく、**わざと彼らを追い払いませんでした。結局、わざと神様の命令に従わなかったのです。なぜでしょう？**

一つ目は、イスラエル民はカナンの地に住んでいる人々から農業技術を伝え受けもっと豊かな生活をしたい欲張りがあったからです。二つ目は、もっと便利な生活のため、カナンの人々を残し、彼らの労働力を利用したくなったからでした。それで結局不従順のためイスラエルの民は後約100年間他国の攻撃を受ける苦しみを受けるのみならず、自分たちもカナンの人たちのように変質(へんしつ)されてしまったわけです。

目の前に見える物への欲張りや有益のため今までイスラエルの民を救い、食べさせ、導き入れて下さった神様とその命令に従わなかった結果、カナンの人たちを残し、彼らからカナンの偶像崇拜、罪、墮落の文化に影響受け、士師時代の歴史を暗闇の歴史を作ってしまったのです。ここの士師記でも神様は徹底的に信じる者の従順を強調して下さいます。神様に従うというのは神を信頼すると言う意味にもなると思います。これが個人と共同体の成敗を決定しました。

#### <まとめ>

メッセージを終わらせたいと思います！愛するクリスチャンプレイズの神の家族のみなさん！

神の御言葉に従うことは今すぐには損を受けるかのような見える時があるかも知れませんが、それは決して損になりません。

神に今はすぐ従わなくても大きな有益が目の前にあるかも知れませんが、後には大事な、大きな事を失ってしまう損失になるかも知れない事を忘れないで下さい。

今日この士師記の時代の人たちのようにまた繰り返して愚かに生きることがないように切に祈ります。

士師記の時代にも、今日にも同じく生きておられる神様の御前で徹底的な信仰と従順の生活を保つことにより、キリストにある豊かな恵みと祝福を我々の時代にも、うちの子供たちの世代にもさらにさらに受けづく全クリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族となりますように主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン！